

「写本コレクションからみるパレンバンの文化の豊かさ」

Titik Pudjiastuti 氏 (インドネシア大学講師)

本報告の発表者 Titik Pudjiastuti 氏は、インドネシア写本学会 (Masyarakat Pernaskahan Nusantara: MANASSA) 会長であり、インドネシア大学文学部講師陣によって主に構成されているインドネシア写本協会 (Yayasan Naskah Nusantara : YANASSA) の一員でもある。YANASSA は、昨年秋、COE 研究叢書として、*Katalogue Naskah Palembang – Catalogue of Palembang manuscripts* を出版した。本発表は、そのカタログ作成のために、2003年8月に、インドネシア、スマトラ島南部の都市パレンバンにおいておこなわれた写本調査に基づく、同地における文学活動の概要である。

調査の行われたパレンバンはサカ暦604年にダブンタ・ヒヤンにより、ムシ側流域に建設された、シュリーヴィジャヤ王国の首都の一つである。当時、東南アジアの仏教と仏教文化の中心地であったが、1375年にジャワのマジャパヒトによる攻撃を受け、いったんその歴史の幕を閉じた。しかし、東南アジアにイスラーム流入後再び、文学活動が盛んになり、18世紀には、同地はイスラーム学及び文学の中心地の一つとなった。特に、アラビア文字を用いたマレー語 (ジャウィ) による執筆活動が広く展開された。

執筆者の多くは、イスラームの知識を持つウラマー達であり、彼らの執筆活動を後押ししたのは、パレンバン王国と中東より招かれたアラブ人ウラマー達であった。宗教関係の執筆で特に有名なウラマーは、Syaikh Abdussamad al Palimbani で、*Ratib Samman Zuhrat al Murid fi Bayan Kalimat al Tauhid* などの著作が有名である。他にも、Syihabudin bin Abdullah Muhammad (著作 *Kitab Hakikat al Bayan*)、Muhammad Muhyiddin bin Syihabuddin (著作 *Hikayat Syekh Muhamad Syaman*)、Kemas Fakhuriddin (著作 *Fath al Rahman*)、Muhammad Ma'rif bin Abdullah Khatib Palembang (著作 *Tariqat yang dibangsan kepada qadariyah dan nakhsabandiyah*) などが有名である。こうしたイスラーム学の著作だけでなく、パレンバンでは多くの文学も執筆された。たとえば Kiai Rangga Sayanandita Ahmad bin Kiai Ngabehi Mastung によって執筆された *Hikayat Palembang*、Pangeran Tumenggung Kartamenggala による *Cerita Negeri Palembang*、Sultan Mahmud Badaruddin による *Syair Sinyor Kosta, Syair Nuri* などが有名である。

これらの写本がいつ誰によってどこで書かれたかという情報は、コロフォンと呼ばれる前書き部分に記されている場合がある。今回の写本では、kampong 19 ilir という村で書かれた写本が多く発見された。写本の現在の所有者は、多くの場合、親・祖父または師から譲り受け、遺産として保管していた。

写本の種類は、今回は以下のように分類をおこなった。1.天文書、2.言葉、3.祈祷、4.イスラーム法学、5.ハディース、6.物語 (hikayat)、7.神学、8.薬、9.プリンボン (primbon: 占い解説書)、10.コーラン、11. 歴史 (sejarah)、12.系譜、13.手紙、14. 詩歌 (syair) 15.イスラーム神秘主義、16. ワヤン (wayan: 影絵芝居) 17.その他であった。その他には、日記、婚姻登録書などが挙げられる。

写本に使われていた言語は、アラビア語、パレンバン語、ジャワ語、文字は、アラビア文字、ラテン文字、ウル文字、ジャワ文字であった。ウル文字は、主に、アラビア文字がこの地域に入ってくるまで使用されていた文字であり、プリンボンなどに用いられていた。また、村落部では祈祷師 (dukun) などによって、この文字が多く、使われていた。文章は韻文及び散文で書かれていた。タイトルは、つけられているものと、ついていないものがあった。ついていないものに関しては、カタログでは仮タイトルをつけてある。写本に使われている紙は、西洋紙が主で、他にもダルワン (dluwang: 樹木の皮から作られた紙)、グルンパイ (gelumpai: 竹の筒) があった。写本の厚さは様々で、922ページのワヤン物語から、1枚の手紙までであった。コロフォンはないものとあるものがあった。写本の保存状況は、概ね悪く、よい保存環境には置かれていなかった。

今回パレンバン写本のカタログ出版は、まだ多くのことを語っていない。しかし、そこに収録された写本一つ一つを詳しく調べることによってさらにパレンバンの写本文化の深層に触れることができるはずである。これからも詳しい調査・研究を進めていきたい。

発表の後、パレンバン写本の研究上の位置付け、所有者の社会層、歴史と物語の差異などについて質問が出た。